

薬師如來（漆原町）

昔、漆原にはとても小さい家が沢山ありました。山ん寺や ぼたん寺があり、観音様がありました。お山一体は、とても有難い土地で、薬師瑠璃光如来も祭つてあります。人々はお薬師さんと呼んで信仰していました。

この薬師如來は、漆原で医者をしていた弥次右衛門さんが村人たちのために祭られたものですが昔北海道に移住されたのでその後、親せきの人がおもりをしています。

弥次右衛門さんが北海道へ移住されるとき薬師如來を持っていこうとしましたが、木造の五十七センチぐらいの仏様で軽はずなのに、どうしたところか重くて重くてとても持ち上げることができなかったと言ひ伝えられています。

五月八日は、そのお薬師さんのお祭りで、村中

の人たちは早くからその日の来るのを楽しみに待っていました。祭りの日はどの家でもぼた餅を作つて、

「今日はお薬師さんのお祭や」と言つて心ウキウキ、その日一日はあまり仕事がないにつかなかつたと言います。

薬師如來のお守りをしている人は御堂にお花やぼた餅を飾り、ろうそくをともし、こざを敷き終ると、デンデンデン……とお参り太鼓を打ち鳴らしてみんなに合図をしました。

田や畑で働いていた若いお嫁さんたちは太鼓がなるのを今か今かと首を長くして待つていたので、「ほら、太鼓が鳴った。はよ、参ろうさ。」

「せつかく参ろう 参ろう」

と声を掛け合い、仕事を止めて、いけい顔をして（遠慮しない様子）家へとんで帰りました。

家に帰ると一ちようらい（一番いい）の着物を着、だてこいて（おしゃれをして）お薬師さんに



子供もみんながお参りしました。

薬師如来は医王いおう仏ぶつとも言いい、手には薬くすりのつぼを
持もっておられます。むかしの人たちは病びょう気きになる
と、ただ一ひとすじに薬師如来にお参りし、両手りょうてを合
わせて、

「どうなかお願ねがいでいせんす。うらら(私わたし)は足あしのひ
ざざがいととうてて(痛いたくて)いととうて歩あるののに具ぐ合あい

お参まりしまし
た。お薬師やくしさ
んは、人々びょうきの
病びょう気きを治なす
しいことかなや悲かな
しいことなど
苦く悩なうをいやす
仏ぶつ様さまとして
信しん仰ごうされてい
たので、男おとこも
女めも年としよりも



悪わるうあるある
て歩ある
かかれへん。どうか どうか、もとの足あしに
しておくんなはいい
「うららは腹はらがいととうて、いととうて、まま(御飯ごはん)
がなあも食くえんんので困こまってえんす。どうか、ま
まが食くえるようにお頼たの申まうせんす。」
と毎日まいにち参まりて祈願きがんしたそうです。
こうして病びょう気きが治なった人ひとの中なかにはお礼らいにと石造いしぞう
りのかわいいおさるさんを寄進きしんされた人ひともいます。

お薬師さんのお徳とくでしょうか。漆原には弥次右
卫門もんさんのほかに「蔵くらのうち」と呼ぶ医者をした
家もあり、医者はいつもかこに乗のって歩くほど繁
盛じょうしたようです。

お薬師さんの御縁ごえんでしょうか。六十軒けんぐらい小
さい家があったという跡あとに老人ホームらうじん『五岳園ごがくえん』
が出来きました。

方々ほうほうから体の悪い人たちが集まり養生じやうじやうをする
ところところです。入院にゅういんされているお年寄りいんねんは戸籍こせきも
『五岳園ごがくえん』へ移うつされているので因縁いんねんを感じると古
老らうは言いいます。

夏かになると五岳園ごがくえんで納涼祭なつげふまつが開ひらかれて、家族かぞへと
患者かんじやさんと世話せわをする人が一いっ緒しょになって歌うたったり
踊おどったり、飲のんだりで夜よを過すごして楽しみます。

この祭まつりには村のお年寄りとせや子どもたちも集まっ
てにぎわい、ちよつどむかしのお薬師祭いしやまつりのよう
な嬉うれしさがすると言いいます。

時代じだいの流れながれでお薬師いしやさんは今は山の中、草の中

で荒あれはてて参まる者ものは一人もいません。しかし、
村人むらぢに知恵ちえを授たまげ、病まや苦くるしみを乗り越こえさせて
こられたお慈悲じひの深ふかいお薬師いしやさんは、お堂どうの中で
今いまも尊たつく光ひかっておられます。

蔵くらのうちと呼ばれた医者いしやは山本良瑞やまもとらみずという人
で山本喜太郎やまもときたろう氏の曾祖父そそうふに当あたります。
その頃ころの古文書こぶんしよが若干せうぜん保存ぼぜんされています。